

< 研究ノート >

## 第2回日本語教育実習の報告

金久保 紀子

The Report of the Second Practice Teaching

KANAKUBO Noriko

### Abstract

This is a report about the Second Practice Teaching, which was held during July 12 to July 19 at Tsukuba Women's University with 12 Taiwan students. The purpose of the report is to discuss about the contents of this teaching activities and their problems. Trainees' consciousness toward the activities occurred as most of the problems. The timing of the activities and the ways of evaluation are also discussed.

キーワード：日本語教育実習 生教材 新聞作成

### 1. はじめに

筑波女子大学にとって2回目となる日本語教育実習が実施された。本報告は今回の教育実習のあらましを報告すると共に、特徴ある活動を紹介することを目的としている。

文化庁が出した報告書『日本語教育のための教員養成について』(2000)の中でも、教師養成とりわけ、教育実習は今後ますます重要になっていくであろうと述べられている。特に、学習者との異文化的な接触を積極的にもち、「教授者と学習者とが固定的な関係でな

く、相互に学び、教え合う実際的なコミュニケーション活動としての日本語教育」を重視した方針を打ち出している。

本学でも第1期の卒業生が日本語教育のアシスタントとして海外に出て、実際に活躍している。また、より専門的な実践的な能力を求めて大学院進学を目指す学生も出てきた。教育実習をより実践的にしていくことは、日本語教師としての選択の幅を広げるためにも必要なことであると考えられる。この機会に、実習の報告をし、改めて実習の内容を振り返ると共に、今後の改善の方向を見いだしたい。

## 2. 実習の概要

実習は基本的に昨年度の日程、方法を踏襲した。準備期間から助手1名に参加してもらい、期間中は助手2名で、担当者の補助にあたった。

期 間：2000年7月12日～19日

（3泊4日のホームステイを含む）

場 所：筑波女子大他

参加者：筑波女子大生18名

台湾大学日本語文学系学生12名

（1年生6名、2年生2名、3年生4名）

担 当：金久保紀子

引 率：服部美貴 台湾大講師

助 手：

亀田千里（筑波大学文芸言語研究科5年）

武田詩子（筑波大学地域研究研究科2年）

## 3. 実習前の問題点

実習は準備段階から始まっている。準備段階の主な問題は、学習者の確定と、実習生の共通の時間の確保の2点であった。

<学習者の確定について>

筑波女子大学には留学生別科がない、初級・中級レベルの留学生が少ないなどの理由から、学内で学習者を確保することは困難である。

そこで、昨年から台湾大学の学生を招いて、実習を行うこととした。今年度も台湾大から学習者を招くことは方針としてあったが、全体で何人の学習者が来るか、どの学年の学習者が来るのか、という点は実習の1ヶ月前になるまで不明であった。このことから、実習のレベル設定が難しく、教材の準備、手順などに大きな影響を及ぼした。

<実習生の共通の時間の確保>

実習生は全員4年生で、大学の最終学年としてそれぞれ忙しい時期を迎えている。多くの大学が抱えている問題であると思われるが、日本語教師養成コースで学んでいる学生が必ずしも皆日本語教育になりたいと思っているわけではない。

したがって、実習の準備期間は多数の実習生にとっては就職活動の時期と重なる。就職活動はここ数年前倒し傾向が強く、3年次の2月ころから、説明会などが立て続けに行われているようである。この時期に、グループで共通する時間を確保することは非常に困難であった。

一方で、日本語教師を進路として真剣に考えている学生がおり、実際に実習を行う実習生間の意識の差は実習全体の運営を考えた際、大きな問題となった。

実習前のミーティングは、まず昨年度12月に説明会を行い、実習生の把握、全体の実習内容の確認、調整を行い、今年度4月からは2週間に1回程度開き、直前1ヶ月は毎週全体ミーティングを持った。その他、グループは個別にミーティングを開いた。

## 4. 実習の内容 <資料参照>

実際の実習は以下のようなグループ分けて実施された。

- (1) 教壇実習 生教材班  
新聞作成班
- (2) 文化実習

### 4.1 教壇実習・生教材班について

<目的・準備>

日本語教育の現場では、教師は日々新しい教材を作る作業に追われている。既存の教材だけでは、目の前の学習者に不十分、あるいは不適切な場合、教師は学習者に合わせた内

容の教材を作る必要に迫られる。特に中・上級の学習者には、より実践に即した教材が要求されるため、日本人が実際に利用している生教材（テレビドラマ・映画・CM・新聞・雑誌）などに材料を求め、それを加工して授業で利用するという方法を採用する人が多い。

この班の実習の目的は、生教材作成の過程を自分たちで行い、それを実際の授業で使ってみるという経験を持たせることにある。実習生にはあらかじめ、この実習内容は難しいこと、教材を準備するのに時間がかかることを伝えた。この班に参加した学生は4名（含む韓国留学生）であった。

どのような材料から教材を作成するか、どのような時間割を組むかなど、他の要素との関連を見ながら徐々に相談を進め、最終的には2名ずつのグループを作り、一つは聴解、もう一つを読解の部分を担当することとした。扱う生資料はテレビドラマとし、今回はフジテレビ系で放映された『古畑任三郎』シリーズから1話を選ぶこととした。このようなドラマはノベライズされた文字資料もあることから、読解と聴解の両方の授業を同じ素材を使って行うことが可能であった。

#### <準備状況>

- 5/12 方針の決定  
テレビドラマを使用する
- 5/19 使用する資料の選定  
古畑任三郎 さよならDJ
- 6/上旬 筑波大学留学生センターの授業見学 聴解と読解の授業
- 6/15 授業で扱う項目を抽出、問題の作成
- 7/11 教材完成・リハーサル

#### <準備した/配布した資料等>

- ・1話分の文字資料
- ・各授業用タスクシート
- ・単語表

#### ・宿題

#### <実際の授業>

台湾には日本の音楽、テレビの情報がほとんど時を置かずして届けられ、広く視聴されている状況にある。しかし、今回選んだ「古畑任三郎」についてはあまりよく知られていなかったため、学習者は新しい情報が多く、全体をつかむことに苦労していた様子である。

実際の授業は次のような時間で行われた。全6回540分（90分×6）をかけて、一話45分間のドラマの理解ができるように設定した。

聴解① 読解① 聴解② 読解②  
聴解③ 聴解④

#### <実習の反省と今後>

授業について実習生からは主な反省として、

- ・授業時間と内容の消化のバランスが難しい
  - ・学習者の反応がよく読みとれなかった
  - ・技術的なこと（自分の立つ位置、教具の利用、声の大きさなど）に関する未熟な点があったこと
  - ・読解の課題が多すぎたこと
- などの点があげられた。

一方、学習者からは

- ・実習期間中にきちんと1話が終了できてよかった。
  - ・課題が多くて大変だった
  - ・ドラマの内容は理解できたが、日本語を勉強したような感じがしない
- などの感想が寄せられた。

担当者から見ると、本来の目的であった、生資料を教材化する過程は十分に経験できたと満足している。しかし、学習者のレベルと条件にあった教材を作成するという点については、少々問題があったと感じている。来日

してからでないという状況では、ある程度は仕方がないことではあるが中長期にわたって実行できる教育実習形式と比べると、条件の差が大きい。また、実習生にかかる負担の大きさも想像以上であった。実習生は4年生で卒論も抱えているので、今までのように学期の期間中に行うのではなく、実施時期を夏休みにする、などの案も検討する余地がある。

また、この班には韓国人留学生が含まれていた。日本語の授業を外国人から受けるということ、台湾の学習者はどう考えているのかは少々不安であったが、学習者からの評価は概ね好評であった。今後もこのようなケースが増えることを考えると、教育実習に参加してもよい留学生の日本語レベル、あるいは日本語教育に関する能力を担当者が責任を持って見極める必要を感じる。

#### 4.2 教壇実習・新聞作成班

教壇実習とは言っても、この班には実習全体を通して、新聞を作成してもらうことを課題とした。新聞とはいっても、台湾や日本の文化的な比較や時事的な問題も入っている冊子のことである。この課題を選んだ理由は、実習期間中たえず、日本語で何かを書くことを学習者に課したかったこと、新聞作成の活動を通して、常に日本人実習生と学習者がコミュニケーションを取らなければならない状況を作ることであった。したがって、活動の目的としては、新聞そのものを完成するだけではなく、どのように双方が完成に向かってコミュニケーションを取るかということにあった。

##### <準備状況>

- 5月中旬 新聞内容のおおまかな決定
- 6月中旬 台湾大参加者への連絡  
資料を用意するように指示

##### <実際の授業>

授業時間としては実習期間中に全4回360分(90分×4)であった。授業は責任者を中心に進められ、大半の授業時間はグループによる新聞内容の詳細検討と、学習者の日本語作文の添削に使われた。授業時間外に学習者の宿舎に赴き、添削をする、話し合いをするなどの活動を行った。

完成した新聞には「おっはー」というタイトルが付けられた。台湾の学習者が皆で推薦したタイトルである。日本に来て、台湾大では習わなかったあいさつ、しかもやはり言葉になっているあいさつに新鮮な驚きを感じたようで、新聞のタイトルとしてふさわしいと考えたらしい。

新聞はB5版全21ページになった。記事の内容は

- 1) 自己紹介 2) ホームステイ先について
  - 3) 来日前後の変化 4) 校外活動について
  - 5) 知恵袋 6) 中国語講座 7) 日常会話での日本語
  - 8) 若者事情 9) 台湾版キムタクを探せ 10) 芸能人ランキング 11) テレビ番組事情
  - 12) 伝統的な年中行事 13) 携帯電話事情 14) 日本料理に挑戦
- と多岐にわたっている。

##### <授業の反省と今後>

一種のプロジェクトワークとして取り組んだ新聞作成であったが、内容が盛りだくさんで、時間が足りなかったというのが、学習者・実習生双方の率直な感想である。学習者は宿舎でも課題に追われ、かなりの労力を作文に費やした様子である。一方でできあがったものがあるので、達成感は大きかった。

また日本人との共同作業がほとんどであることから、学年による日本語力の差が、作業に与える影響が大きく、思うように作業が進まないというグループもあった。日本語力が低い学習者にとっては負担が大きく、短い実習期間にふさわしい量であったかは疑問が残

る。

この活動について担当者としての反省は、実習生が経験不足から、実習期間と時間、および内容とのバランスをとる目が足りないことを軽視していたということである。実習生の自主性に任せることは可能ではあるが、もう少し準備段階から介入して、あまり学習者へ負担がかからないような配慮をする必要があったと思われる。

実習後に配布した新聞を読んだ学内外の方からは好意的な感想が多数寄せられたことは担当した実習生にとっては大いに励みになった。

#### 4.3 文化実習について

文化実習は大きく2つのパートに分けられた。①「ワープステーション江戸」見学に関すること、②つくば秀英高校訪問に関すること、の2つである。

この活動の目的は、学習者にとっては大学以外の場所に活動の場を移すことで、学内では経験できない日本語、あるいは日本文化に触れることであり、実習生にとっては、いわゆる旅行の幹事のように、段取りをくみ、様々な手配をし、学習者が気持ちよく活動に取り組めるような環境を作ることにある。

「ワープステーション江戸」とは大学から車で約50分ぐらいのところにあるアミューズメント施設で、江戸時代の生活に関する展示や、江戸の妖怪、人物に関するゲームが体験できたりするところである。今回「ワープステーション江戸」を選んだ背景は1)大学から日帰りできる位置にある、2)台湾でも放送されている大河ドラマの舞台になっている江戸時代を体験できる、3)学習するばかりでなく、楽しく日本語に触れる機会を作るなどがあげられる。

また「つくば秀英高校」訪問を行ったのは、昨年度の実習で行った小学校訪問が不評であったことと台湾からの学習者が日本の高校に

興味を持っていたからである。

昨年度もこのような文化実習は実施している。日本語教育というと教室の中だけで行われるイメージがあるが、今後は日本語を通して、日本を知ってもらえるような活動が重要になるであろうという担当者の判断から今年も行うこととした。

#### <実際の授業>

授業としては、活動の前日にオリエンテーションを行っただけである。オリエンテーションは、江戸時代の文化に関する紹介と、明日のワープステーション江戸に関する情報を与える機会とし、実習者がデモンストレーションなどを行った。文化紹介では、江戸の風俗を紹介するために「水戸黄門」のビデオを用意していた。特に食文化については、実際にそばを用意し、その由来、食べ方についての実演を行った。またワープステーション江戸に向けての情報として、日本の妖怪についての知識を与えるために、「ゲゲゲの鬼太郎」のビデオを見せるなどの工夫をしていた。

当日はタスクシートが準備され、そのタスクをこなしながら、基本的にグループ活動であった。

「つくば秀英高校」では3年生の中心としてわざわざこの活動のためのグループを作ってくださり、各大学、高校の紹介、全体での質問会、小グループでの話し合いなどが行われた。活動の趣旨があまり明確でなかったために、何を話せばよいのかとまどっている場面も見られた。「話し合い」という機会を設けるまでは考えが及んでいなかった、その内容までは用意しきれいかなかった様子である。

#### <実習の反省と今後>

「ワープステーション江戸」での活動については、好意的な評価が学習者からは出されていた。年齢的に近い実習生と学習者が、一緒に何かを見学し、体験する活動は、多少内

容に不備があってもあまり評価が下がらない傾向があるようである。

高校訪問については、活動の趣旨に疑問を持った学習者もいたが、大学1年生が多かったことで、逆に最近まで台湾で高校生をやっていた立場から、日本の高校に興味を持ち、高校生の発言に共感できる点があった様子である。特に「将来の夢のために大学に入りたい」という高校生の発言に対して、台湾からの学習者は大きな反応を示し、自分たちが高校生の時を振り返って、そのような考えを持っていなかったことに気がついたという感想を述べていた。このような活動は日本語教育実習の本来の目的とは必ずしも合致してないが、意味のある活動と言える。

文化実習全体を通して大いに問題であると考えるのは、実習生の実習への取り組み方であった。前述したとおり、就職活動をぶつかったことで、共通の時間を事前に持つことが非常に困難な状況であったが、安易に実習に取り組まれては、何より学習者には迷惑であるし、実習そのものの位置づけが、不明確になるおそれがある。実習への参加を制限する方向は今までは考えていなかったが、今後は検討してもよい項目かもしれない。

## 5. 実習全体のまとめと今後

今年度の実習も無事に終了したことは非常に喜ばしいことであるが、問題となるべき点

も明らかになった。

先に述べた学習者の確保の問題もさることながら、教育実習をどう位置づけるかということは深慮すべきである。教育実習の重視する姿勢をとるのであれば、金久保(2000)で述べたような実習生の差別化と共に、本学の日本語教師養成コースを終了するとどのようなことができる日本語教師になれるのか、という方向付けを考える時期に来ていると考える。

日本語を学習している側の多様化はよく話題になるが、対応すべき教師側の多様化はあまり問題になっていない。学習者側からのニーズを再検討すると共に、本学の体勢として何が可能なのかを考え、来年度の実習に取り組んでいきたい。

### <謝辞>

今年度の日本語教育実習を実施するにあたりご協力いただいた各施設・機関、各担当の方々にご場を借りて深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### <参考文献>

- 文化庁(2000)『日本語教育のための教員養成について』  
日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議  
金久保紀子(2000)『副専攻日本語教師養成コースにおける日本語教育実習のあり方』  
『東京家政学院筑波女子大学紀要』第4集pp143-154  
東京家政学院筑波女子大学

<資料1>

	内容
7/11 (火)	台北--成田 成田→(マイクロバス)→筑波 筑波研修センター泊
7/12 (水)	9:00 開講式 10:00 オリエンテーション 12:00 昼食 13:00 実習 聴解① 16:00 学長主催 reception
7/13 (木)	9:00 実習 新聞作成① 読解① 12:00 昼食 13:00 実習 聴解② 文化① 16:00 解散
7/14 (金)	9:00 実習 全日 ワープステーション江戸 高校訪問 16:00 ホームステイ先へ
7/15 (土)	ホームステイ
7/16 (日)	ホームステイ
7/17 (月)	ホームステイ先から大学へ 9:00 実習 新聞② 読解② 12:00 昼食 13:00 授業参加 日本語教育概論 16:00 懇談会(中華料理を作ろう)
7/18 (火)	9:00 実習 聴解③ 新聞③ 12:00 昼食 13:00 お茶とお花の体験 16:00 解散
7/19 (水)	9:00 実習 読解③ 聴解④ 12:00 昼食 13:00 実習 新聞④ 16:00 閉講式 お別れ会
7/20 (木) <海の日> ↓ 7/25 (火)	筑波研修センター check out ↓ 自由旅行  成田--台北